

日本語における直接受身文の研究：中国語との対応 関係を中心に

梅, 佳

<https://doi.org/10.15017/1654604>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 梅 佳

論 文 名 : 日本語における直接受身文の研究
—中国語との対応関係を中心に—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

日本語には、一つの文法範疇としての受動態というヴォイスがあるが、中国語文法論の分野においては、文法範疇としてのヴォイスの存在は十分には認知されていない。中国語には、形態論レベルにおいて受身や使役を表す特別な述語形態はない。つまり、中国語の受身は介詞や語彙によって表現され、形式上は日本語の受身文と大きな違いを呈している。このような相違が中国人日本語学習者にとって、日本語の受身文を理解しにくいものになっている。それ故、いかにして日本語受身文を正しく使うかは、日本語教育や翻訳研究に携わる中国人にとって重要な課題である。日本語受身文はどういうときに使われるのか、すべて中国語受身文に翻訳できるのか、これらはいずれも日本語学習者を悩ませる問題である。そこで本研究では、『中日対訳コーパス』から用例を収集し、日本語直接受身文及びその中国語対訳文を分析することで、それぞれの特徴を明らかにし、その分析結果に基づき対照研究を行った。

本研究の構成は全8章に分かれる。

第1章では序論、本研究の背景、目的、意義及び全体的構成を紹介した。

第2章は先行研究の概観と本研究の位置づけである。日本語の受身文に関する研究、中国の“被動句”に関する研究およびその二つの受身表現の対照研究を概観した上で、先行研究の問題点及び本研究の位置づけを試みた。

第3章では、本研究の理論上の枠組みおよび研究方法について詳述した。まず、本研究が基盤とする理論を明らかにし、次に、本研究で使用した『中日対訳コーパス』に収録された作品の詳細およびデータ収集方法を述べた。

第4章では、収集した日本語直接受身文及びその中国語対訳文について、主格名詞と斜格名詞、述語動詞、文の意味特徴という三つの方面から対照分析を行い、各パターンの中国語表現と対応している日本語受身文の特徴を明らかにした。本章の考察により、以下の点が明らかになった。まず、中国語の能動文と対応する日本語直接受身文は、述語動詞としては他動性の弱い動作動詞か、言語活動動詞か、抽象的な物の生産動詞である。また、文の意味特徴から見ると、能動文に訳された直接受身文は、受益、中立の意味を表している。一方、中国語の「被」構文と対応した日本語直接受身文は、他動性が強く、対象を変化させる一般動作動詞を述語動詞とするものである。最後に、中国語の意味上受身文に訳された直接受身文は、主格名詞がほとんど非情物を指示し、文の多くが「中立的」意味を表わすという特徴を持っている。

第5章では、視点の置かれる位置、またその転換から受身文における主語の選択に関して考察を行った。本章の考察により、以下の点が明らかになった。日本語の受身文におけるガ格は「視点」の配置序列に厳密に従う。一方、中国語は「視点」の配置序列だけに制限されず、日本語より主語の選択が自由である。また、日本語は「視点」の固定化を重視する言語であり、文章全体のみなら

ず、一つの文の内部でも「視点」の固定が要求されている。一方、中国語においては、文章全体の「視点」は固定しているが、一つの文の内部では視点の固定化が日本語ほど厳しく要求されていないため、「視点」を固定させるために受身文を用いることも極めて少ない。さらに、日本語の場合は、事態を主観的に把握する傾向があるのに対し、中国語の場合は、たとえ話し手自身が事態に臨場していても、事態を自らと切り離して把握し、また自身の行為や自身に関わる事態であっても、自身を客体化して把握し、言語化する傾向がある。一方、「に」、「によって」、「から」を用いる日本語直接受身文と中国語の対応関係についての分析から、「によって」、「から」を使用している日本語直接受身文は中国語の能動文と対応していることが多いことが分かった。

第6章では、受身文の述語動詞に関する考察を行った。日中両言語の共通点としては、一般に、動作性或いは対象への影響の強い動詞は受身文の述語動詞として用いられやすく、対象に影響を与えない動詞は受身文の述語動詞として用いられることが少ない、という点が挙げられる。一方、相違点としては、まず、抽象的な生産の意味を表わす動詞、授受動詞、放置の意味を表わす位置変化動詞は中国語受身文の述語動詞としては用いられない。具体的な物を生産する意味を表わす動詞、対象が非情物の移動動詞は中国語受身文の述語動詞として用いられるが、「被」などの受身マーカーを持つ典型的な受身文ではなく、「意味上の受身文」として現れていた。さらに、状態心理動詞はめったに中国語受身文には用いられない。また、両言語とも動詞の他動性が強ければ強いほど受身文になりやすいが、述語動詞にアスペクト助詞や結果状態を表す補語が付加されやすいのは、中国語受身文の特徴である。

第7章では、日中受身文の意味特徴についての考察を行った。日中受身文はともに「被害と迷惑」「受益」「中立」などの意味を表わすことができるが、日本語には「中立」の意味を表す文も多いが、その多くは中国語では能動文に訳されており、中国語で受身文となるのは「被害」の意味を表すものが一般的であった。また、「動作主の称揚と動作主への批判」の意味を表わす文も少なくないが、それは中国語受身文の意味上の特色と言えよう。

最後の第8章では、第4～7章で考察した内容をまとめた上で、今後の課題について述べた。

本研究は教育現場に成果を還元できる研究を目指して、言語教育への実用化に向けて日中対照分析を行った。その成果は、日中両言語の翻訳、とりわけ日本語教育に応用することができ、さらには、日本語と中国語の事態認識の相違を解明することに繋がると期待できる